

Associé



おかげさまで 30 周年

No.32 / 2023.07

KYOTOGRAPHIE 心の糸/松村和彦

展示タイトルの「心の糸」は、谷口政春さんが、認知症を発症した妻、君子さんから「お父さん」と言われ父とみなされたときに、妻との心の糸が切れてしまった、と語ったことに由来しています。

2023 年 4 月 15 日から 5 月 14 日 KYOTOGRAPHIE（京都国際写真祭）が開催。

「心の糸」は、松村さんが 2017 年から認知症の本人・家族・周囲の人々に取材を重ね、それぞれの日々や移ろい、歩みを写真や文章を組み合わせ、認知症の人の心象を形にした展示空間でした。

会場は、Ⅰ 認知症の世界、Ⅱ 共に歩く、Ⅲ 心の旅、Ⅳ 心の糸とそれぞれのテーマで写真とコメントが展示。

松村さんの「認知症について学んだことだけを伝えたいわけではない。認知症から学んだことも伝えたい。それは、心をつなぐ糸だった。社会への警鐘だった。言葉を使わない対話だった。」という言葉を考えながら、魚屋で働いていた協会職員の下坂さんや高野事務所のご利用者である谷口ご夫婦、松村さんがこれまで取材された方たちの足跡をたどりながら思いに触れていきました。

松村和彦 1980 年生まれ。京都新聞社の写真記者として「人生」「社会保障」「ケア」をテーマに取材している。地域医療の先駆者だった京都・西陣の早川一光医師に長年にわたり密着。早川氏に関する作品が「写真新世紀」で佳作を受賞。

ここはどこ
よく知っているはずだ
喧騒が頭に響く
落ち着こう
もやが心を覆う
スマホを取り出し、
地図をタップする
もやの中で確かさが輝いている

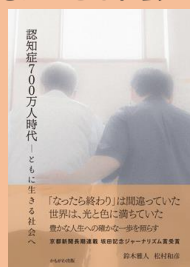
（Ⅰ 認知症の世界）

「1、2、3、4、5… 3、4… 数字が消えていく」
（Ⅰ 認知症の世界）

「幸せの青い鳥はいつも一緒にいると
気付きました」
（Ⅲ 心の旅）

認知症 700 万人時代—ともに生きる社会へ

著者：京都新聞社
鈴木雅人・松村和彦
版型：四六判上製
頁数：240 頁
出版：かもがわ出版
刊行：2023 年 7 月 15 日



「アルツハイマー型認知症だった君子さんはすでに亡くなっていたが、家族やヘルパーが君子さんの在宅介護について記した 75 冊の連絡ノートやたくさんの写真が残されており、私は認知症の旅をたどることができた。」（Ⅳ 心の糸）



5月17日(水)「北文化会館」、5月27日(土)「京都テルサ」において、計4回、「全体ヘルパー会議」が開催されました。

全体ヘルパー会議は、新型コロナウイルスの流行による中止が続いており、実に4年ぶりの開催となりました。

自宅⇄ご利用者宅に直行直帰することが多いヘルパーにとって、全体ヘルパー会議は、所属事務所を越えたヘルパーが一堂に会して時間を共有し、協会所属ヘルパーであることを再認識して、法人の状況や取組を伝える貴重な機会となっています。

4年におよぶ中止の間、「京都市外郭団体から民間の社会福祉法人へ」「法人の一体化」「理事長の交代」といった、法人を取り巻く環境が大きくかわり、今回の会議ではそういった経過の説明や今後の方向性を示すと共に、同じ法人であってもこれまでヘルパーが触れることの少なかった施設や児童館、地域共生社会推進センターの概要や取組を知ってもらえるようなプログラムでした。

<プログラム>

■ 理事長挨拶

4月就任の宮路新理事長は、1986年発足当時からヘルパーと共に在宅支援に関わり、法人変化の只中を歩んできました。法人化して30年という節目の中、外部ではなく、初めて内部からの理事長就任となります。法人理念「くらしに笑顔と安心を」をより実現できる組織となるため必死で取り組んでいくとの決意を述べました。

■ 本部長挨拶

4月の法人一体化により、居宅・施設・児童館の三部門がそれぞれ独立していた組織が統一されました。塩澤本部長は、「京都福祉サービス協会は“大きな象さん”みたいですね」と言われたエピソードを紹介。「大きな組織だが動きが遅くて柔軟性がない」の意味であったと捉え、一体化のスケールメリットを活かし、地域に根ざした細やかなサービスを提供できる組織になると述べました。井上本部長は、コロナ禍にて法人内施設で多数のクラスターが発生、感染しても入院できない入居者に対して、不安を抱えながら使命感でケアを行うスタッフの姿に敬意を表すと共に、在宅でも同様にケアを行うヘルパーへの感謝を述べました。

■ 2023年度事業計画説明

地域ケア部・矢野部長より、「7つの重点項目」と「3つの基本目標」について説明がありました。

■ 法人内事業及び取組報告

【施設福祉事業】

施設福祉部・下岡副本部長、吉川部長より、法人施設の市内12拠

点で展開する10事業について説明。ヘルパーは、多くの法人施設があることを改めて実感し、事業内容の理解を深めることができました。

【児童福祉事業】

児童福祉部・木戸本部長、池田部長より、「児童福祉法」や「児童館」に関してクイズ形式で説明。児童館に通う子どもたちの笑顔あふれるスライドによる事業紹介は、高齢者と接することが多いヘルパーにとって、非常に新鮮に映り、「子どもには幸せになる権利がある」「子どもが幸せに育つことは大人の責任である」といった結びの言葉が心に残りました。

【地域共生社会推進センター】

河本代表、森副代表より説明。ヘルパーに馴染みの少なかった多くの取組が紹介され、地域に根ざす一員として、ヘルパーの新たな参加が期待されます。ウルフルズの「ええねん」の曲に合わせて、全拠点スタッフのいきいきした姿を映す自作動画が流され、最後に「サービス協会が！」のかけ声に合わせて、「ええねん！！」と会場全員が元気な声で右手を掲げました。

【人材確保の取組】

相談支援部・新宅部長より、「SNSの取組」「<whicker まごと>とのコラボ企画」「ヘルパー確保」について説明。<whicker まごと>とは、現役京大院生が立ち上げた、訪問介護適用外サービスを提供するベンチャー企業。今年2月の節分企画では、大学生と法人職員がご利用者宅を訪問して豆まきや恵方巻を楽しみ、KBS京都のニュースにも取り上げられました。

■ ヘルパー会議レポートより

今まで「理事長ってどなた？」って思っていたのに、やっとやっと知っている方が理事長になりました！やっぱり、一から知っている方が一番ですね！宮路さん！元気なお姿が見られてほっとしています。

“ええねん”の動画がとても良かったです。“こうしなければならぬ”という思いにとらわれ過ぎて、落ち込んだり悩んだりすることが多いのですが、“それでええねん”とあるがままに受け止めてそこからみんなで考えようというメッセージとして、心に響きました。

久しぶりに全体会議が開催され「新しいサービス協会!!」という印象が残った。若い人達でこの時代に合った試みをしていることを、ビデオ等を通じて知ることができた。“時代の流れについていかなきゃ”と実感。

「くらしに笑顔と安心を」を合言葉としてサービス提供し続けて今に至っているのは、先輩ヘルパーの方々がご利用者の信頼と期待に応えてこられたからだと考えています。この鎖を繋げていけるように日々の支援に励みたいと思います。



3部門がひとつとなり、それぞれの良さを生かし連携をとりながら、協会が地域に必要なとされる法人になっていくスタートを切ったことにワクワクした。

子どもからお年寄りまで「㊦だんの㊧らしの㊨あわせ」ふくしの文字にはとても素晴らしい意味があると思いました。

クイズや映像等で、各事業所と運営体制がとてもわかりやすかったです。それぞれの状況や問題点、課題等わかりやすく話していただき、初めて知ること多かったです。次からは、アソシエで取り上げていた話題にも理解が進みます。



ヘルパーの今日の一品

6月21日(水) in 紫野デイルー

法人内外のつながりをつくる「よこ糸カフェ」。

6月はAブロック企画「料理の鉄人」風、ヘルパー料理対決が開催されました。紫野デイサービスセンターの特設キッチンスタジオに高野事務所、小川事務所、北事務所のヘルパー代表「アイアンヘルパー」が登場し、互いの経験、技術、知識が光る45分の熱戦が繰り広げられました。

ルールは『テーブルに用意された食材を見てから何を作るか決めて、時間内に調理する』。これは、普段限られた時間と冷蔵庫にある物だけで、おいしさと栄養バランスを考えた料理を作るというヘルパー業務のプロの技そのものです。



調理中はテレビの

ような実況で、

ヘルパーの得意

料理なども

ご紹介。

そして、あっと

いう間にたくさんの

品数がテーブルに並びました。

しかも、終了と同時に片付けもほぼ完了。

提供時間が決まってるヘルパーならではの、鮮やかな手際です。

審査員のほうが緊張する美食を経て、優勝は小川事務所に！最後は参加者みんなで試食タイム。早くも第2回大会の要望もありました。



濱岡理事から 退任のメッセージが届いています！

長い間、協会の理事を務めさせていただきましたが、今期の任期満了（2023年6月23日）をもって理事を退任させていただきます。現在、福祉・介護業界は人材不足等、厳しい環境下にあります。今後も協会には大いに期待しています。

これから非営利の福祉事業体が、その役割を果たしつつ、発展し続けるためには新しい仕事を絶えず開拓していくことが重要です。非営利の事業体は、地域の人々のニーズに基づき、それに対応する仕組みを創っていくことに努力をしてきています。しかし、その仕組みができると、今度はそれを維持することに注力し、新しいものを創り出すことを止めてしまいます。そして時間の経過とともに、維持するためのエネルギーも尽きて衰退していきます。これを回避するには、常に新しいものを創る、仕組みを変えることにチャレンジすることです。こうすることで初めて組織ガバナンスを維持し、事業体として発展し続けることができます。今が本当に良い時期です。これまでは新しいものを創るにしても、既存のものを運営するにしても市の外郭団体という要素が中心にありました。しかし、2019年度に外郭団体から外れたことに伴い、今後は、社会福祉法人として、自分たちの力で新しいものを創る、そしてでき上がったものを維持することが求められます。訪問介護事業等において厳しい状況はありますが、協会には、自信をもってこれらに取り組んでもらいたいと思います。



[プロフィール]

濱岡 政好 元理事

佛教大学名誉教授

京都市高齢者施策推進協議会

会長等の多数の要職を歴任。

協会理事として、本年6月まで

約16年に渡り就任。



後任は、佛教大学社会福祉学部長の藤松素子教授が就任されました。

下坂厚の写真日記⑨

#記憶とつなぐ



アジサイには雨がよく似合う。

雨の日だからこそ見える景色がある、思い出がある。



アンブレラスカイ 見上げるとカラフルな傘がいっぱい浮かんでます。ポルトガルの小さな街で芸術祭の一環として始まったそうです。



国立京都国際会館で日本認知症ケア学会大会が開催されました。メインホールの壇上に立ち、自身の認知症について語るとは、診断を受けた当時は想像もできませんでした。いつも支えてくれる家族や仲間のおかげです。

